



令和6年12月20日(金)、講義棟C第3講義室において、令和6年度医学部医学科白衣着衣式を執り行いました。

本式典は、臨床実習への参加の可否を評価する医学生共用試験に合格した4年生に、臨床実習の開始にあたって、医学生としての決意と自覚を促すことを目的に毎年実施しているものです。

はじめに田邊剛医学部長の訓辞があり、白衣に込められている「清廉潔白」と「高い専門性」という2つの意味について話されました。続いて112名の学生の総代として、藤本滯さんが医学生共用試験合格証および臨床実習生(医学)認定証を授与されました。

続いて、医学部同窓会「霜仁会」の福田進太郎会長による挨拶のあと、同会から授与された白衣を学生全員が着衣しました。藤本滯さんからは、式典開催に対する謝辞と、医療人としての新たな一歩を踏み出す決意が述べられました。

医学部附属病院の松永和人病院長からは、これまで多くの辛いことを乗り越えてきた自分をほめること、また、臨床実習の時間を大切にしながら学びを積み重ねることを期待する旨の言葉が贈られました。

医学科4年生は1月から本院において、指導医の下で臨床実習を行います。



ふるさと納税を活用した 人材育成支援事業の開始について

このたび、山口大学医学部・附属病院は、宇部市と連携協力し、ふるさと納税を活用した人材育成支援事業を開始しました。お申込みはふるさと納税の各ポータルサイトから可能です。また、返礼品はありません。宇部市民の方もお申込みが可能です。くわしくは、ホームページをご覧ください。



※山口大学基金の
ページへリンクします。

山口大学医学部 医学科後援会 会報 R7.1 Vol.18



Yamaguchi University School of Medicine

特集1 器官病態内科学講座／山口県から世界に向けて優れた医療人材を送り出す

特集2 耳鼻咽喉科学講座／山口大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科の新たな歩み

今年度の学生自治会・サークル活動報告／第79回医学祭の開催について

トピックス 令和6年度 白衣着衣式

ふるさと納税を活用した人材育成支援事業の開始について

ご挨拶

山口大学医学部医学科後援会会長

石原 得博



至る所で医師不足を耳にしますが、医学部医学科の入学生は私たちの頃（昭和38年）の2倍以上（令和3年9357人）になっています。問題は医師の偏在、中でも地域偏在と診療科偏在です。地域偏在では都会と地方で大きな差がみられます。医師偏在指標（人口10万あたりの医師数）で、全国平均255.6、東京353.9、青森184.3で、山口県228.0です。この問題解決には厚労省が力をいれています。何らかの解決案がでると思います。もう一つの問題の診療科の偏在、特に外科系（脳神経外科、外科、形成外科、産婦人科など）の減少の解決については学生諸君が決められる問題と考えます。専門分野の偏りは以前より問題になっていました。特に、大学の基礎系の医師の教官は極端に少なく、医学教育に危機感を持っていました。私は少ない病理学を専攻しました。国内留学やアメリカ留学、教授、医学部長、さらに退職後は地域医療に携わり、多くの経験をしまし

た。世界最先端の研究（主としてアミロイドーシスについて）をした時もありますが、現在はへき地医療に携わり、多くの科（内科、外科、整形外科、眼科、皮膚科、産婦人科、病理など）の先生と関わっています。何れの専門科目（診療科）も必要不可欠で、専門分野を専攻する際には熟慮して頂きたいと思います。

新型コロナ感染症が落ち着き、学生諸君の生活も元に戻り、部活をはじめ、いろいろな行事が復活しています。進級や卒業試験の厳しさはコロナとは関係ありません。気を抜かず頑張りましょう。皆さんは医学という崇高な職業を選択したのでから一生勉強です。

後援会としては、山口大学に入学して良かったと思えるように、家庭と緊密な連絡をとりながら学生の福利厚生の手助けができればと思います。

教職員および保護者の皆さん宜しくお願いします。

新年のご挨拶

医学部長

田邊 剛



新年明けましておめでとうございます。皆様におかれましては、健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

山口大学医学部は、新年を迎え、臨床・教育・研究の面でさらなる発展を目指しています。研究面での大きな成果として、細胞デザイン医科学研究所が設立されました。この研究所は、本学が強みとする革新的細胞デザイン技術を核とし、次世代の細胞治療や遺伝子治療のシーズを創出する国際研究開発拠点を目指しています。がんや遺伝病などの難治性疾患の治療法開発に取り組むとともに、これらの革新的治療法を伴侶動物にも応用し、検証することを目指しています。

教育面では、山口東京理科大学との連携が大きく進展しています。学部学生レベルでは連携協定を締結し、多職種連携教育プログラムを共同実施しています。さらに、大学院での単位互換を行うことで、より高度な連携を進めています。この連携は両大学に大きな利点をもたらすと期待されています。山口大学にとっては、薬学部を持たない状況下で総合的な医療教育を提供する機会が得られます。特に、チーム医療の実践力向上において、医師を目指す学生が薬剤師を目指す学生と共に学ぶことで、将来の医療現場での連携能力を早期から育成できます。一方、山口東京理科大学に

とっては、医学部との連携により臨床に即した薬学教育を展開する機会を得られます。これにより、地域の健康・医療・福祉の発展に寄与する人材育成が可能となり、地域医療への貢献にもつながります。

国際的な医療人育成にも力を入れており、ネイティブスピーカーによる医療英語教育や海外研究室での研究活動、国際的な医学教育認証に向けた取り組みなど、国際化対応に向けた教育環境の整備を積極的に進めています。これらの取り組みは学生の国際感覚を涵養し、将来グローバルに活躍できる医療人材を輩出するための重要な基盤となっています。国際交流については、インドネシアのウダヤナ大学、タイのマヒドン大学との学生交流を行い、アジア・太平洋地域の大学との連携を深めています。

新しい年には「乙巳」という干支が訪れます。「巳」はヘビを象徴し、その脱皮によって成長する姿から「再生」や「生命」の象徴とされています。「乙」はまだ発展途上であり、これから努力によって実を結ぶことが期待される年でもあります。

山口大学医学部は、この新しい年も引き続き臨床・研究・教育・国際化各分野で着実な成長を遂げ、社会に貢献する医療人材の育成に邁進してまいります。皆様の変わらぬご支援とご協力を心よりお願い申し上げます。

令和6年度

理事会報告

書面審議（令和6年8月5日～8月16日）

令和5年度事業報告

令和5年度の実施事業について、主なものをご紹介します。

1. クラブ活動に関する事業

- クラブ活動及び自治会活動への助成
- 課外活動運営補助
- キャンパス間移動用バス運行補助
クラブ活動に参加する1年生送迎（吉田キャンパス⇄医学部キャンパス）のために、バス借上げ費用の一部を補助

※各クラブの先輩が後輩を車で送迎することが常態化による事故等の危険性を防ぐため、平成24年度から、学生自治会及び利用する部活動からの負担金、医学科後援会及び保健学科後援会からの補助により送迎バスの運行を継続して実施しています。

実施期間：令和5年6月～令和6年2月 運航日数 119日
運行方法：大型バス又は小型バス
週5日（平日）運行、1日1往復
吉田キャンパス発：月～金曜日 18時00分
医学部キャンパス発：月～金曜日 22時30分

2. 医学祭の運営に関する事業

3. 医学教育に関する事業

- 医学部生特別講演会の開催
講座主催による学生向け講演会を実施（4講座分）
※令和5年度は開催なし。
- 医学教育に係るFD助成
- 臨床実習への補助
- ワクチン接種経費の補助：臨床実習開始前のワクチン接種費用
自己負担軽減のための助成
- 医師国家試験対策への補助：模擬試験料の補助
- 篤志解剖全国連合会参加の助成
- 学生の、就学環境・生活環境の整備
- 高度学術医育成のための奨学金助成
※該当者がいないため実績なし

4. 正常解剖体蒐集に関する事業

5. 入学卒業の運営に関する事業

- 大学入学共通テスト及び個別学力試験の補助

6. 保護者会運営に関する事業

- 4年生保護者見学会（白衣着衣式）開催経費補助

令和6年度事業計画

令和6年度に継続して同様に事業を実施します。

- クラブ活動に関する事業
- 医学祭の運営に関する事業
- 医学教育に関する事業
- 正常解剖体蒐集に関する事業
- 入学卒業の運営に関する事業
- 保護者会運営に関する事業

令和6年度 役員のご紹介

役員名	氏名	現職
会長	石原 得博	山口大学名誉教授
副会長	黒川 典枝	霜仁会副会長
顧問	田邊 剛	医学部長
保護者理事	中村 直樹	
	中村 伸一	
	夏山 文太	
	林 雅太郎	
	花村 泰成	
	藤井 慎一	
	若佐 裕治	
	東 良和	
	若松 弘也	
	田村 博史	
医学科関係等理事	草野 倫好	（新任）
	安部 浩司	（新任）
	松永 和人	病院長
	白石 晃司	教授（学生委員長）
	白澤 文吾	教授（副学生委員長）
	坂本 啓	教授（教務委員長）
監事（保護者）	太田 康晴	教授（副教務委員長）
	田尾 健	霜仁会理事
	夏山 文太	
監事（医学科関係）	中村 和行	山口大学名誉教授

高度学術医育成のための奨学金

平成22年度から、文部科学省の特に社会的要請が強い分野の研究医を養成する施策に対応し、大学院への進学を奨励し将来の研究医を養成する目的で「高度学術医育成コース」を医学科に設置しています。

本コースには、高度学術医育成特別プログラム（SCEAプログラム）と高度学術医育成一般プログラム（AMRAプログラム）をもち、学部・大学院教育の一貫システムとして4年生から大学院授業の先取り受講や研究活動を開始することができます。

高度学術医育成特別プログラム（SCEAプログラム）は、履修者のうち年間2名に月額5万円の奨学金制度が用意されており、法医学を中心とする基礎系分野へ進路選択を行った場合には返還が免除されます。

医師国家試験受験状況

発表日	新卒者			既卒者			合計		
	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率	受験者数	合格者数	合格率
第116回（R4.3.16）	107	102	95.3%	6	2	33.3%	113	104	92.0%
第117回（R5.3.16）	128	124	96.9%	10	3	30.0%	138	127	92.0%
第118回（R6.3.15）	109	103	94.5%	10	5	50.0%	119	108	90.8%

山口県から世界に向けて、 優れた医療人材を送り出す

山口大学大学院医学系研究科
器官病態内科学講座
教授

佐野 元昭



医学科生保護者の皆様、はじめまして。令和5年12月に慶應義塾大学医学部循環器内科から赴任しました佐野元昭と申します。

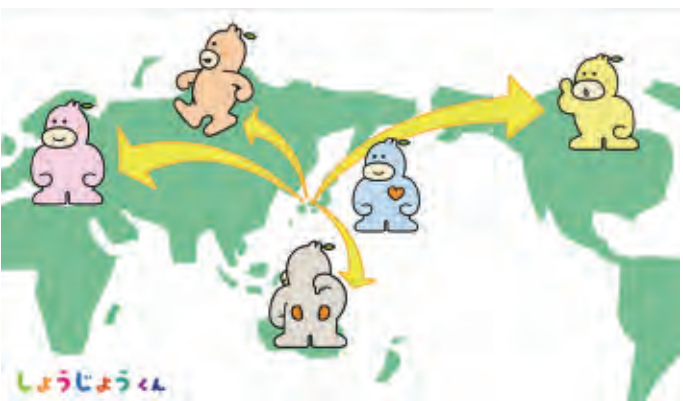
慶應義塾大学の創設者は、「日本の近代教育の父」とも呼ばれる偉大な人物である福澤諭吉先生であります。1984年以来、一万円札の「顔」でありましたが2024年の紙幣刷新で“引退”することになりました。一方で千円札の新しい「顔」となった北里柴三郎は、慶應義塾大学医学部の初代学部長であり、近代日本医学の発展に大きく貢献しました。彼が確立した血清療法は、感染症の治療に革命をもたらし、世界的に高く評価されました。ドイツ留学中にロベルト・コッホと共に研究を行い、破傷風や結核の研究でも重要な成果を上げました。第1回ノーベル生理学・医学賞の候補に選ばれたことも彼の業績の大きさを物語っています。

慶應義塾大学附属病院で25年働き、山口大学附属病院に赴任しておどろいたことは、臨床のアクティビティーの高さです。3次救急を担うことで、緊急性の高い患者にも対応できる体制が整っていますし、地域の医療をリードする役割も果たしています。さらに、感心したのは、山口大学附属病院は、学生や研修医に対して熱心な指導を行い、次世代の医療人材に力を入れている点です。慶應義塾大学病院は東京という大都市にあり、多くの医師が集まる一方で、山口大学附属病院は地域医療の要として、将来の医師を育成する使命があります。地域医療を支えるためには、地元ニーズに対応できる医師の育成が不可欠です。そのため、教育に対する熱心さや取り

組み方もそれぞれ異なるのは自然なことです。

当講座は循環器内科、腎臓内科、膠原病内科が集まるナンバー内科の伝統を引き継いでおります。各専門分野の知識を持つ医師たちが集まり、血行動態から分子レベルの議論まで展開することで、より高度な診療を提供させていただいております。

大学附属病院は臨床、教育、そして研究の三本柱で成り立っています。研究は新しい治療法や診断法の開発に不可欠ですし、未来の医学の発展を支える基盤となります。当科(器官病態内科学講座)では、患者さんに直接利益をもたらす研究を精力的に進めております。詳しくは、ホームページをご覧ください。



山口大学耳鼻咽喉科・ 頭頸部外科の新たな歩み — 地域医療と先端研究の融合を目指して

山口大学大学院医学系研究科
耳鼻咽喉科学講座
教授

菅原 一真



令和6年11月1日付で、山口大学大学院医学系研究科耳鼻咽喉科学講座の教授を拝命いたしました菅原一真と申します。このたび、新任にあたり、山口大学医学部医学科後援会の皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

当教室は、本学の前身である山口県立医学専門学校の開校から1年半後の昭和20年9月に設立され、昭和24年2月に故・本庶正一先生によって教室の形が整えられました。令和6年11月現在、教室には医師17名、事務補佐員2名、技術補佐員1名が在籍しています。また、附属病院では言語聴覚士2名がフルタイム、1名がパートタイムで診療に携わっております。

耳鼻咽喉科は、耳、鼻、喉(咽頭・喉頭)に加え、頭部および頸部の臓器や構造を対象とする専門分野です。この領域には、聴覚、平衡感覚、嗅覚、味覚、音声・嚥下機能など、生活の質(QOL)に密接に関わる感覚や機能が含まれます。また、頸部には甲状腺、唾液腺、リンパ節などの重要な臓器が集中しており、それらに関連する疾患の診断と治療も行っています。治療の対象は炎症性疾患やアレルギー性疾患から、腫瘍性疾患(良性・悪性)や遺伝子疾患まで多岐にわたります。特に近年では癌治療をはじめとした頭頸部外科分野の重要性が増しており、放射線治療や化学療法、再建手術など、多職種との連携による集学的治療が不可欠となっています。このような背景を受け、当科では令和5年に附属病院の診療科名を「耳鼻咽喉科」から「耳鼻咽喉科・頭頸部外科」に変更し、頭頸部外科分野のさらなる発展に注力しています。

また、当教室は伝統的にめまいの研究・診療に力を入れており、最近では新たな診断装置の開発を行い、市販化に成功しました。入院診療においては、内視鏡を用いた低侵襲手術や人工聴覚器医療などの先進的な治療法を導入し、患者様のQOL向上に寄与しています。

さらに、基礎研究にも積極的に取り組んでおり、難聴モデル(マウス、ゼブラフィッシュ)を用いた難聴発症機構の解明と治療法の研究、薬効物質スクリーニング研究、難聴遺伝子を持つゼブラフィッシュを活用した機能解析研究を進めています。これらの研究を通じて得られる科学的探究心は、教室員の臨床業務にも大いに生かされていると考えています。

当教室は、山口県内の患者様の健康を支えるため、地域の関連施設の先生方と連携しながら、診療と研究に努めてまいります。医学科後援会の皆様には、今後とも当教室の活動にご理解とご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。



耳鼻咽喉科学講座の研究・活動内容

部門	内容
めまい部門 耳科部門	研究から開始した眼振解析システムを「yVOG」として製品化。 経外耳道的内視鏡下耳科手術(TEES)の導入など手術方法の改良。 人工内耳手術が過去最高件数を記録。 新しい埋込み型補聴器の保険適応が近づき、重要性が増大。
鼻科部門	内視鏡下副鼻腔手術(ESS)で術前計画やナビゲーションシステムを活用。 腫瘍や頭蓋底手術などへの応用を推進。 呼吸器・感染症内科と連携し好酸球性副鼻腔炎などに対応。 アレルギー性鼻炎への舌下免疫療法や手術治療を実施。
頭頸部腫瘍部門	神経モニタリングを導入し、安全性を向上。 放射線治療科と連携し化学放射線療法やIMRTを実施。 分子標的薬や免疫チェックポイント阻害剤を用いた治療を実施。 再建手術や内視鏡下手術を含む低侵襲治療を推進。
睡眠時無呼吸・いびき部門 嚥下・音声言語・喉頭部門	ポリソムノグラムを用いた診断とCPAP、手術治療を実施。 喉頭気管分離術、喉頭閉鎖術などの外科的治療を実施。 内視鏡下喉頭微細手術を実施。
小児耳鼻・難聴部門	新生児期からの難聴診断と早期療養体制の充実。 遺伝診療部と連携した遺伝子診断や遺伝カウンセリングを実施。
高次統合感覚器医療センター 基礎研究部門	補聴器外来、聴覚言語訓練、人工内耳リハビリテーション、平衡訓練を実施。 難聴モデルマウス、ゼブラフィッシュによる難聴発症機構の解明と治療法研究。 トランスレーショナルリサーチによる薬効物質スクリーニング。 難聴遺伝子を持つゼブラフィッシュを用いた機能解析研究を実施。

今年度の学生自治会・サークル活動報告

山口大学医学部学生自治会
会長
医学科4年

中川 恭輔



本年度、山口大学医学部学生自治会で会長を務めさせて頂いております、医学科4年の中川恭輔と申します。

学生自治会とは、山口大学医学部に所属する全ての医学生により構成される組織で、活動は多岐に渡り、山口大学医学部で学ぶ学生全体との関わりをもちます。具体的には、新入生のサポート、学生主体の組織・団体(部活やサークル)の統括、医学教育や学内設備に関しての先生方や学務課との懇談、カリキュラム委員会・美化委員会を始めとした各種委員会の補助等です。

本年度の活動につきまして、まず新入生歓迎行事は、感染症対策に十分配慮した上、対面で行いました。部活動の勧誘だけではなく、新入生と上級生が交流できる貴重な場となりました。

7月には、学生で地域医療探求セミナーに参加しました。医師を志す山口県の高校生を対象として、山口大学医学部を案内したり、学生生活・受験の体験談を話したりと、県内の高校生と交流を行いました。

課外活動では、本年度は例年通り西日本医科学生総合体育大会が開催されました。その中で、水泳部個人100mバタフライ3位、柔道部団体戦3位、漕艇部男子シングルスカル4位という素晴らしい成績を取っております。加えて、野球部の

中国四国大会優勝、水泳部の100m個人メドレー優勝など、多くの部活で中四国大会、九州山口大会での功績を聞いております。また研究活動では山口大学学生創業プロジェクト山口県産農産品からつくる新医薬品～山口から世界へ～が国際シンポジウムYU-COH2024で若手研究者奨励賞をはじめ、第27回おもしろプロジェクト2023学長賞を受賞し、様々な分野での活躍が見られた1年でした。

課外活動を行う際に毎年問題になるのが山口市～宇部市間を1年生が移動するためのバスについてです。近年のバス代高騰に伴い課外活動の予算を圧迫する状況が続いておりますが、今年度もバス運行を無事に行うことができました。バス運行を続けられることは医学部後援会からの助成をはじめ、山口大学医学部に関わってくださる様々な方のご支援、ご協力のおかげだと感じております。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

大会やコンクールなど、コロナ以前と同様に行われるようになり、学生も日々の活動により熱が入ってきているように感じております。今後も勉学、課外活動共に熱心に取り組んでいきたいと思っておりますので、今後とも、山口大学医学部、並びに学生自治会をよろしく願い致します。



第79回医学祭の開催について

～医祭合祭～

みんなの力を分けてくだ祭



山口大学医学祭実行委員会 委員長
医学科4年

北島 正和



第79回医学祭は10月4日から6日まで3日間にわたって開催されました。本年度の医学祭は学生・卒業生・関係者の皆様はもちろんのこと、地域の皆様、子供達をも巻き込んで、多くの方々と共に作り上げていく医学祭を目指し「医祭合祭～みんなの力を分けてくだ祭～」とさせていただきます。また本年度も医学祭は医学会との合同開催とさせていただきます。一から学祭を作り上げることは初めてで多くの困難がありましたが、たくさんの方にご協力いただき成功を治めることができました。お力添え、ご指導いただきました皆様誠にありがとうございました。また医学祭にご支援いただきました皆様、誠にありがとうございました。

4日の前夜祭では1年生によるダンスコンテストが行われました。多くの1年生に参加いただき医学祭を楽しんでいただけたと同時に医学祭へ関心を持っていただくことができたと思います。5日の本祭初日には、部活対抗でのカラオケ大会やカップルコンテストなどの新たな企画が行われ大変盛り上がりしました。またアーティストライブは初の試みとして、2組のアーティストの方に来ていただく、対

バン形式で行われました。鈴木鈴木さんとハジ→さんに来ていただき大変盛り上がりしました。6日には毎年恒例ビンゴ大会やお笑い芸人のラバーガールさんによるライブ、ミスター&ミスコンテストが行われました。どの企画でも5日と同様に大変盛り上がりしました。

医学祭はステージ企画のみでなくドクターヘリの展示会や学生による研究発表、各部活動の展示も行っております。ドクターヘリの展示や心肺蘇生法講座などを通して地域の皆様、子どもたちに医学に触れ合う場を提供することができました。また研究発表、部活動の展示でも日頃の活動の成果をお見せすることができたと思います。

最後に、伝統ある山口大学医学祭の実行委員長を務めさせていただきありがとうございました。私一人の力だけでは力不足のことが多くありましたが、その度に多くの方に支えていただきました。医学祭には多くの方々に関わっていて、その皆様のおかげで医学祭が大成功に終わったのだと思います。医学祭に携わっていただいたすべての皆様に熱く御礼申し上げます。ありがとうございました。

